

## ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (4)

藤野早苗

1887年8カ月のイタリア滞在からロンドンに戻ったジェームズはひたすら仕事に専念したい思いにかられていたようだ。兄ウィリアム宛ての手紙に、かつては憧れであった社交界からもできるだけ遠ざかりたいこと、この先10年間に何か重要な仕事をしたいこと、今まで以上に良い仕事をしたいことを繰り返し書いている。(Letters III 201) 彼のこの強い願望の背景には自分の本が思うように売れないあせりが多分にあったのだ。ジェームズの名前を世に知らしめた国際的テーマを扱った小説を書き続けることにも疑問をもちはじめた彼はイギリスを扱った小説に専念しようとするが、イギリスの出版社との交渉が行き詰まるとアメリカを市場にしようと考えもする。経済的安定と名声を求めるジェームズは劇作に活路を見出そうとするが、結局惨めな失敗に終わる。このような経験をとおしてジェームズのアメリカについての思いや見方はどう変化していくのであろうか。本論はこの間のジェームズの揺れ動く気持ちの軌跡を家族や友人に宛てた手紙、ノートブック、作品の分析をとおしてたどり、1898年に雑誌 *Literature* に10回にわたって連載された“*American Letters*”に示されるアメリカについての見方にいたる必然性を探る。

---

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第12号 pp. 121

ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (4)

藤野早苗

## I

1888年出版の「現代の警告」(*Modern Warning*) はほとんどとり上げられることのない小品である。たしかに構成も語りも一貫性を欠き、短編小説としては同時期の他の作品、例えば「パタゴニア」(*The Patagonia*, 1888) や「生徒」(*The Pupil*, 1891) などに見劣りがする。しかし新旧両大陸の文化の違いが人の心に及ぼす影響をテーマとして書くことに疲れてきたジェイムズの揺れ動く心情を投射した作品としては興味あるものである。

物語はアガサという一人のアメリカ人女性が母親とヨーロッパ旅行中に、イギリス人の貴族で国会議員でもあるルーファス・チェイスモア卿と恋仲になり、求婚されるが、イギリス人嫌いの兄マッカーシーに猛反対されるところから始まる。マッカーシーはルーファス卿個人というよりもイギリス人が嫌いなのである。だから妹がルーファス卿と結婚することはアメリカを裏切ることになると思うのだ。卿は結婚はアガサと彼二人の問題であって、国籍を問題にするのはおかしいと主張する。卿の主張はそのとおりで、国籍にこだわるマッカーシーの考え方はいかにも狭い。

ジェイムズは女性にとって自分の国とは何かという問題を取り上げている。マッカーシーは前記のように国籍意識が強い。一方、結婚は個人の問題と主張する卿の考え方も「女性にとって自分の国は自分の家であり、庭であり、自分の子供であり、社交の世界だよ」<sup>(4)</sup> (45) という彼の言葉が示すように、女性は家庭にあるものという伝統的父権社会の考え方で、女性の主体性を認めているわけではない。周囲の見方がこのようであるとき、アガサは自分のアイデンティティがつかめずに苦悶するのである。

旅行中ボローニャで母親を失った時に駆けつけてくれたルーファス卿の献身にほだされて、アガサは兄の反対をふりきって卿と結婚するが、その結婚式の日ほど自分がアメリカ人であることを意識したことはなかった。彼女はイギリスの生活には好きになれないことがたくさんあったのである。

結婚して5年後、二人はアメリカを訪れる。卿が西部まで各地を視察旅行している間、アガサは兄や友人とニューヨークの日々を楽しむ。卿が見たア

アメリカ社会の様相はまさに「民主主義の恐怖、警告の例証」であって、彼はこれを政治家として自国への警鐘のために、本にして出版することを計画する。この卿の印象は短編「視点」(*The Point of View*, 1882)の中の、アメリカの民主主義を視察に来たイギリス人政治家の印象と重なりあう。原稿を読んだアガサはショックを受ける。彼女の目から見ると、「無論アメリカにも悪いところはあるが、全体として見たら閉塞状態のイギリスよりはずっとましな国」(70)に思えるのである。この彼女の思いはまさにアメリカ人としての意識である。そして夫に反発するのであるが、ルーファス卿は「アメリカが彼女の国であることを忘れていた」(71)ので、彼女の反発に驚く。卿の意識では妻は自分の所有物であるから、アガサのアイデンティティはイギリス人以外の何ものでもない。

夫に一旦は出版を断念させたアガサだが、やがて兄のマッカーシーが休暇を楽しむべくロンドンを訪れるという知らせがきた時、彼女は「あの立派なものをぜひとも出版してほしい」(81)と夫に頼む。この彼女の態度は兄の前で自分をルーファス卿の妻、つまりイギリス人として再確認する意図のあらわれである。だがアガサは兄を家に招待しておきながら、到着の直前に毒をのんで自殺してしまう。

「イギリス人と結婚することはアメリカを裏切ること」(32)という兄の反対を押し切って愛するルーファス卿と結婚したアガサだが、アメリカ人の意識を捨て去ることはできなかったのだ。ジェイムズはアガサの死をとおしてアメリカ人か、イギリス人かというアイデンティティを求めることが不毛な煩悶であることを示していると言えよう。

この作品と前後して書かれたと思われるウィリアム宛の手紙には、国際的状况をテーマとした作品を書くことが無意味に思えてきた様子がかかなり詳細に述べられている。(Letters III 244) さらに次に引用するW. D. ハウエルズ宛の手紙では今後はイギリスを扱って小説を書くことを宣言している。

One thing only is clear : that henceforth I must do, or half do, England in fiction -- as the place I see most today, and, in a sort of way, know

best. I have at last more acquired notions of it, on the whole, than of any other world, and it will serve as well as any other. It has been growing distincter that America fades from me, and as she never trusted me at best, I can trust *her*, for effect no longer. (*Letters* III 284)

宣言はしているものの、この文面は自信にみちてはいない。イギリスが自分が「一番よく知っている国」と言っているが、「ある意味では」とつけ加えているし、「他の国についてよりも知識を多く得た」と言葉を選んでいる。その背後には「アメリカは段々遠ざかって行く」「自分を信用してくれなかったのも、もうこれ以上信用できない」とジェイムズを感じる事情があったものと推測される。ここに引用した部分のすぐ後に国際的著作権を保護する法律がアメリカの議会で再び却下された<sup>2)</sup> ことに対する苛立ちが書かれていることを併せ考えると、自分の本の販路を考えた上での選択という面も否定できない。

1889年1月から翌年5月まで *Atlantic* に連載された「悲劇の女神」(*The Tragic Muse*) はL. エデルが的確に表現しているように、「イギリスの生活と芸術を題材とした大きな楽しい壁画」である。( *The Middle Years* 255) 同時に部分的にはイギリス社会、および芸術についてのジェイムズの批評も読みとれる。また中心的登場人物であるニック・ドーマーとピーター・シェリングムの対照的生き方にはこの当時のジェイムズの揺れ動く気持ちが投射されていると考えられる。ドーマーは富も社会的地位も捨て、孤独な芸術家の道をたどる妥協のない生き方を選ぶが、シェリングムは芸術のためにキャリアを犠牲にすることをよしとしない。L. エデルはジェイムズは天才的な芸術家であると同時に世俗的な快樂を求める面もあること、つまりシェリングム的な面があって、シェリングムが成功しなかったことを承知の上で、なお自分も両面を試してみたかったのではないかと分析している。精神的自由と文化の伝統を求めてヨーロッパに來た若い日と異なり、中年になったジェイムズは芸術と市場の両面を追求したものと見ているのである。( *The Middle Years* 261-2)

確かにジェイムズの作品は頻繁に雑誌には掲載されたが、単行本は売れないという状況だったようで、彼がそのことに苛立ちと危惧を感じていたことが、1890年のマックミラン宛の手紙からも読みとれる。マックミランは『悲劇の女神』の単行本出版については前金£70（通常は£200-250）を支払うことを申し出た。これを不服とするジェイムズに対して譲歩しない同氏に宛て、以後イギリスの市場はあてにしないことを宣言したものである。

I would rather not be published at all than be publised and not pay .... Unless I can put the matter on a more remunerative footing all round I shall give up my English "market" — heaven save the market! and confine myself to my American. But I must experiment a bit first — and to experiment is of course to say farewell to you. (*Letters* III 275)

しかし先に引用したハウエルズの手紙にあきらかだったように、国際的著作権法がなかなか制定されないアメリカは市場として頼りにならないことをジェイムズは十分承知していた筈だ。そこで彼が選択したのは劇作を試みることであった。

## II

前記のマックミラン宛の手紙より一年ほど前のノートブックに、将来の経済的安定のために劇作に真剣に挑戦する意図が記されている。若いイギリス人俳優のE. コンプトンから『アメリカ人』を劇化することを提案され、喜んで応じようとしている様子だが、注目すべきは“*Oh, how it must not be too good and how very bad it must be! A moi, Scribe; a moi, Sardou, a moi, Dennery!*”という記述である。(53)「劇」としてジェイムズが思い浮かべるのはフランスの劇作家スクライブ、サルドウ、ドネリィ等のコメディであり、そういうものを書こうと考えるが、それは彼の文学、芸術観からすると決して質の高いものではなかったことがわかる。1891年のスティーブソン宛の手紙にはそのことを承知の上で劇作に手を染めるジェイムズの心境が赤裸々に書かれている。

Don't be hard on me ... I have had to try to make somehow or other the money I don't make by literature. My books don't sell, and it looks as if my plays might. Therefore I am going with a brazen front to write half a dozen ... I am glad for all this that you are not here. Literature is out of it. (*Letters* III 326)

しかし、はじめから芸術的満足感が得られるとは思わないが収入を得るための妥協とわりきったつもりであっても、ジェイムズにとってはかなり厳しい経験であっただろうことが推測される。

1891-1895年は“dramatic years”とよばれているように、この間ジェイムズは劇作に専念する。劇作をすれば高収入が得られるという信念で胸算用していた<sup>③</sup>ジェイムズだが、現実には彼の考えるようにはいかなかった。小説の場合には書き終えた作品は完成されたものだが、演劇は作家の書いたものに演出家や役者が注文をつけ、さまざまな変更をせまられる。また舞台上で演じる役者が必ずしも作者の思いどおりに表現しない。しかも観客は期待どおりの反応を示すわけではない。『アメリカ人』は地方巡業に始まり、短期間ロンドンで公演されたが、ジェイムズが望んだような反応は得られなかった。1993年5月7日のノートブックには演劇界についての失望と同時に、自分にはいつでも戻れる文学があることに慰めを見出していることが記されている。(77) 収入のために劇作を試みながら、自分の本質は文学であることを再確認し、戻りたい気持ちに傾いてきたことが窺える。

ジェイムズは劇作がうまくいかなかった理由を演出家や役者、観客の問題とみなしているが、彼自身の創作意識にも問題があったことは否定できない。劇作は文学とはまったく別物と考えて対処したのであるから、出来あがったものはおよそ質の異なった作品となっても不思議ではないであろう。そのことを彼の代表的初期の小説である『デイジー・ミラー』(*Daisy Miller*, 1878)と、それを劇作化した作品とを比較して見てみたい。

『デイジー・ミラー』はinternational situationを扱ったジェイムズの一

連の小説のうち初期の、非常に反響のあった作品である。それは当時のヴィクトリア朝の女性とは異なる奔放なヒロイン像が画期的であったこと、そして新旧両大陸の文化の違いをあざやかに描きだしたことが読者の関心をよんだものと思われる。母親と弟と一緒にヨーロッパを旅行しているアメリカ人の少女デイジーはスイスの避暑地の高級ホテルにおいても、ローマの広場でも、アメリカの田舎町にいる時と同じように気儘に振る舞っている。その姿は周囲の矚目をかうが、なかでもひどく眉をひそめたのはヨーロッパに長く滞在するアメリカ人たちであった。彼らは新旧両世界の文化の差を強く意識するがゆえに、経済力にまかせて傍若無人にヨーロッパを旅行してまわるデイジー一家のような新興成金の不作法な行為が、粗野なアメリカ人のイメージを強めることを嫌悪するのである。そこでデイジーをアメリカ人社会から締め出してしまふ。デイジーが心をよせる青年ウィンターボーンまでが彼女を理解することができずに、見離してしまふ。結果として、デイジーはローマ熱にかかり、悲劇的な死を遂げる。ジェームズは新旧両世界の文化の差がもたらす影響の複雑さをひとりのアメリカ人少女のhelplessな姿に象徴的に描きだしている。その姿をとおして、アメリカ社会がもはや均一ではないこと、新しい国とは言いながら、複雑な社会構造が出来つつあることに注意を向けているのである。本人は何もしないうちに悲劇に追いやられてしまふからこそ、アメリカ人少女の純粹さ、伸びやかさが印象に残るのであるが、劇化した作品になると事情はだいぶ異なる。

ジェームズはフランスの伝統的劇に習い、『デイジー・ミラー』を劇化した。小説との大きな違いはウィンターボーンがデイジーに結婚の申込みをするハッピーエンドにしたことである。その結末から推測できるように、プロットも大幅に変えてしまつた。デイジーの美しさにひかれながら、彼女の自由奔放な振る舞いに戸惑うウィンターボーンではなく、物語では示唆されたただけであったカトコフ夫人の方に彼はより夢中になっているし、デイジーも純粹無垢なアメリカ人少女というよりも、自己中心的で自惚れの強い娘として描かれている。ミラー家で働くユージニオがデイジーとジオバネリの結婚を画策する悪党として暗躍し、それに伴うプロットのどんでん返しが中軸になつ

ているメロドラマなのだ。従って小説の中心的テーマであった文化の違いが人の心に与える複雑な影響やアメリカ人社会の問題などは影をひそめてしまっている。小説を書いたときの創作意識とは異なり、劇についてはフランスのコメディに習い、形式を重視したことが明らかだ。

このようにして小説とはおよそ似てもにつかぬ劇を書いたのはなぜだろうか。ウィリアムやアリス宛の手紙 (*Letters* III 332-3, 286-7) から読みとるかぎり、ジェイムズは金銭的理由から劇作に夢中になったとしか考えられない。具体的数字をあげ、どれだけの利益が得られるという胸算用をしているからだ。しかしそれは当時絶大なる人気のあったアーサー・ピネロやオスカー・ワイルドの場合であって、ジェイムズには彼らのような大衆受けするウィットやセンスが欠けていたし、また根本的に演劇を軽視していたことをL.エデルは指摘している。(*Letters* III 315) 結局上演されたのは『アメリカ人』(*The American*, 1891) と『ガイ・ドンビル』(*Guy Domville*, 1895) の2作だけであった。ジェイムズは後者には絶対的自信をもっていたのだが、結果は無惨な失敗であった。ジェイムズ自身はその理由をひとえにイギリス人観客の低俗性に帰している。みじめな初公演の数日後に書いたウィリアム宛の手紙には “the usual vulgar theatre — going London public” “the abysmal vulgarity and brutality of the theatre and its regular public” (508) などの言葉が連ねられ、また同日のU.フラトン宛の手紙にも観衆を “the uncivilized” と決めつけるなど、イギリス人観客及び演劇界に対して相当な苛立ちようであったことがわかる。しかし結局自分には彼らの求めるものに合わせることはできないと悟り、劇作を止めることになる。この後ジェイムズは劇作の経験を “scenic method” として小説に生かしていくことになるので、劇作に集中した5年間も作家人生のなかで決して無駄ではなかったわけだが、イギリスについての失望はかなり大きかったものと考えられる。

ヨーロッパに來たばかりの頃のジェイムズは社交界に招かれることを好んでいたものだが、1886-7年の8ヶ月のイタリア滞在からロンドンに戻った後はなるべく社交界から遠ざかり、仕事に専念することを望むようになった。かつてジェイムズを魅了していたイギリスの栄光、名声、神秘といったものが



段々色褪せ、汚い部分も見えてきたことがC. E. ノートン宛の手紙に記されている。(LettersIV 45-48)

イギリスについての失望は劇作の失敗によって一層大きくなった様子で、それとともにアメリカに対する郷愁が深まったようだ。1897年6月7日付けのフランシス・モース宛の手紙には彼女が“good, solid, vivid Boston truth”を知らせてくれたことを感謝し、ひどくホームシックになったと書いている。(LettersIV 45-48)

### III

1897年11月ジェームズはロンドンを訪れたハウエルズと久しぶりに再会する。それは旧交をあたためると同時に文学に関しての実務的な目的も含まれていたという。(The Treacherous Years 199) そのハウエルズのはからいで翌年ハーパーズ (*Harper's Weekly*) に *The Awkward Age* を連載することになる。さらに新しく発刊されるイギリスの雑誌 *Literature* に連載でアメリカ文学批評を書くことにもなった。この連載は1898年4月9日から同年の7月9日まで10回続いたが、当時のジェームズのアメリカ文学及び社会についての見方を知ることができる。

第一回目ではアメリカ出版界の当時の状況を概観して自分の考えを述べている。まず目につくのはアメリカでは急激な人口の増加にともない読書人口が膨大な数になったことである。作家も出版界も当然そのことを意識しなければならず、それは当然それまで自分たちが最良のものと理解してきた文学とは異なってくる。しかしジェームズはこれを“Then, for all we know, we may get individual publics positively more sifted and evolved than anywhere else ....” (*American Letter* 651) として、むしろ作家にとって好機ととらえている。また様々な人種や言語からなるアメリカ文化であるが、それら多言語をうまく消化しつつ、英語が中心的言語になってhomogeneousな文化をつくりあげていることに感心している。

また様々な文化が融合して均衡をたもつようになり、かつてのピューリタン文化にこりかたまっていた社会ではなくなったことを歓迎している。その例と

して西部の物語を書いているオウエン・ウィスターの『リン・マックリーン』(Lin Mclean) をとりあげ、辺境の西部の生活様式がアメリカ社会の枠組みにおさまっていることを指摘している。

さらに興味あるのは、アメリカ文学の今後の可能性として、ビジネスマンが“typical American figure”になるのではないかと指摘していることだ。これまで作家も劇作家もとりあげることが多くはなかったが、真剣に触れてはいたこの“often obscure, but not less often an epic, hero”はまだまだ描くべきことがあると言っている。これはジェームズが自らに向けた言葉とも受け取れる。なぜなら1887年に『アメリカ人』でビジネスマンのニューマンを“an epic hero”とした作品を書きながら、その後は中心人物として取りあげていないからだ。ジェームズはこの時点で、20年前の自らの認識の正しさを再確認するとともに、今後の創作の可能性を考えていたのではないだろうか。しかもとりわけ注意をひくのは、次の引用にみられるように、ビジネスマンをアメリカ人女性との関係でとらえている視点である。

He is often an obscure, but not less often an epic, hero, seamed all over with the wounds of the market and the dangers of the field, launched into action and passion by the immensity and complexity of the general struggle, driven above all by the extraordinary, the unique relation in which he for the most part stands to the life of his lawful, his immitigable womankind, the wives and daughters who float, who splash on the surface and ride the waves, his terrific link with civilization, his social substitutes and representatives, while, like a diver for shipwrecked treasure, he gasps in the depths and breathes through an air-tube. (655)

ジェームズはアメリカのビジネスマンの特徴をアメリカ文化のなかに位置づけている。つまりアメリカ人男性の代表とも言うべきビジネスマンは他のことはいっさい顧みず、ひたすら金儲けに専念する。その間に妻や娘は夫や父親の稼いだ潤沢な資金で悠々とヨーロッパ旅行をして伝統ある文化にふれ、知性をみがき、教養を身につける。ヨーロッパの女性たちに比べ、彼女たち

はきわめて自由であるように見え、そういうアメリカ人女性たちが「新しさ」「自由」などいわばアメリカ文化を象徴する姿となっているのだ。だがアメリカ人女性たちの自由は表象的なものであって、主体性のあるものではないことをジェイムズは『デイジ・ミラー』(Daisy Miller, 1878), 『ある婦人の肖像』(The Portrait of a Lady, 1881) などの作品でとりあげてきた。少なくともこの時点までの作品で見る限り、ジェイムズの視線は女性たちに注がれていたことは確かである。しかし今度はそれを縁の下の力持ちとして影でアメリカ文化を担ってきた男性に向け、“the magnificent theme en disponibilite”として取り組む必要性を強調しているのである。このジェイムズの認識はその後の作品、とりわけ後期の大作の一つである『大使たち』(The Ambassadors, 1903) を考える上で興味深い。

またアメリカでは読者も作家も女性が圧倒的数になったことに言及し、それが良い見通しなのか脅威なのかわからないが、とにかく女性の嗜好に左右されざるを得ないと言っている。ここにもジェイムズの鋭い時代認識がみられるが、彼自身はそういう傾向を歓迎しているようには思われない。

4月9日号でも注目すべき言及がある。G. アサートンの“international” novelには批判的である一方、アメリカの小説はごく狭い、特定の地方のことに限定したとき、もっとも興味あるものになるとして、中西部の作家H. ガーランドを高く評価しているのだ。“saturation” (どっぷりつかる) という言葉を使って、“There are moments when we are tempted to say that there is nothing like saturation – to pronounce it a safer thing than talent.”と言っているのである。ガーランドはまさに“soaked sponge of Wisconsin”であって、自分の周辺の雰囲気や時代をじゅうぶんに吸収していて天才であると評価しているのだ。さらに“The point I for the moment make is simply that in the American air I am nervous, in general, lest talent should wish to sail for Europe.” (658)と言っているが、これがジェイムズの言葉であることに目を見張らざるを得ない。若い日、とにかくヨーロッパに行く必要にかられ、“Even if you only saw a portion of England, you would be richly rewarded” (Letters I 134) と書いていたジェイムズである。

アメリカ的なものを再評価するジェイムズの視線は4月16日号ではホイットマンにも向けられる。30年前には“no triumph, however small, is won but through the exercise of art” (*Walt Whitman* 629) と言って、ホイットマンの「詩とも通常の散文とも言えない」(631) ものの芸術性の欠如を厳しく批判していたジェイムズが、ホイットマンの民主的な目、一つ一つのものに意味を見出し高らかに歌いあげるその姿勢をきわめてアメリカ的であると讃えているのである。このことに関してブイテンフェイスが「ホイットマンが変わったわけではなく、ジェイムズが祖国を新たに見つめ直したのだ」(170) と指摘しているように、*Literature* に連載されたアメリカ文学批評を分析すると、ジェイムズのアメリカ再評価の視点が明らかである。

#### IV

アメリカ的なものに価値を見出そうとするジェイムズの姿勢がもっともはっきりと見られるのはN.ホーソン批評である。1879年に書かれた「ホーソン伝」と1897年ホーソンの作品について書いたエッセイ、及び1904年にホーソンの生誕100周年記念に送られた書簡とを比較するとき、ジェイムズの見方の変化が明らかである。

1879年にはジェイムズはホーソンを“the most beautiful and most eminent representative of a literature” (*Hawthorne* 319) として型にはまった尊敬の念を示しながらも、ニューイングランドの生活を題材にロマンスを描き続けるホーソンを“provincial”であるとして、批判の目をもって見ていたことは確かである。それはホーソンの問題であるというよりも、ヨーロッパの伝統と文化を求めてアメリカを後にした彼自身の行動にはっきりとあらわれているように、ジェイムズは文化の香りの希薄な辺境の地からは文学を生み出すのが難しいと考えていたからだ。またホーソンの作品の“a want of reality”, “an abuse of the fanciful element” を繰り返し批判していた。さらに50歳近くになってはじめてヨーロッパを訪れ滞在した印象を綴ったホーソンの *European Diaries* に言及し、ホーソンのそれまでの経験がニューイングランドの村の生活に限られていて、ヨーロッパに来ても、“provincial” な視点を

脱することができないことなどを指摘していた。

しかし、1896年のエッセイではホーソーンの provincialism を批判する言葉は見あたらない。むしろニューイングランドの身近な生活の中から想像力を働かせて訴えかけるものを感じとり、ロマンスを描きだしたホーソーンのを大きく評価している。

晩年のヨーロッパ滞在日記についても、ホーソーンがヨーロッパに違和感を覚えたのは彼のニューイングランドを脱しきれない provincialism というよりも、彼はどこにいても “an aethetic solitary” (467) だからであって、それにより彼は美しい想像力を働かせることができ、限りない人間の深奥を感じとることができるのだとして、ホーソーン の 芸 術 家 としての姿勢を認めている。

さらに1904年の書簡では、ホーソーンは自分の身の社会——1840年代、50年代のセイラム——を題材にロマンスを描いたのであるが、そこに私たちの奥深くにある何か、つまり私たちがしばしば心の中に見出し知っているものを描きだしていることを指摘し、だから彼のロマンスにはリアリティがあると評価しているのである。

このようなホーソーン評価の著しい変化は19世紀も終わり近い頃のジェイムズがアメリカに対しての郷愁を募らせ、アメリカ的なものの再評価に傾いていたことの証明にほかならない。それほどに劇作失敗の痛手が大きく、イギリスの観客、演劇界ばかりでなく、イギリスの文化そのものに失望し、その反動としてアメリカの評価が高くなったものと考えられる。しかしジェイムズは1883年以来アメリカに戻っていない。したがって自分の目で見えた判断に基づく評価ではないのである。

## 注

- (1) 引用文の邦訳はすべて拙訳である。
- (2) アメリカでは国際的著作権は1891年まで認められなかった。1843年以来再三にわたって法案は出されるのだが、議会で否決されたのである。
- (3) 1890年6月6日付けのアリス宛ての手紙には劇作でどれだけの収入の見

通しがあるか具体的な数字の記述がある。それによると月350ポンドは見込んでいたようだ。

#### 引用文献

- Buitenhuis, Peter. *The Grasping Imagination*. Toronto: U of Toronto P, 1970.
- Edel, Leon. *Henry James: The Middle Years*. New York: Avon Books, 1978.
- . *Henry James: The Treacherous Years*. New York: Avon Books, 1978.
- James, Henry. "American Letters" *Henry James: Essays on Literature. American Writers, English Writers*. New York: The Library of America, 1984.
- . *The Complete Notebooks of Henry James*, Leon Edel and Lyall H. Powers ed. New York: Oxford UP, 1987.
- . *Daisy Miller*. 1878. *The Novels and Tales of Henry James*. vol.18. New York: Scribner's, 1937. 26 vols.
- . *Daisy Miller: A comedy in Three Acts* 1882. *The Complete Plays of Henry James* ed. Leon Edel. New York: Oxford UP, 1990.
- . "Hawthorne". 1879. *Henry James: Essays on Literature, American Writers, English Writers*. New York: The Library of America, 1984. 315-457.
- . *Letters I, II, III, IV*. ed. Leon Edel. Cambridge: Harvard UP, 1980.
- . "Letter to the Hon. Robert S. Rantoul". 1904. *Henry James: Essays on Literature, American Writers, English Writers*. New York: The Library of America, 1984. 468-74.
- . *Modern Warning*. 1888. *The Complete Tales of Henry James*. ed. Leon Edel. London: Rupert Hart-Davis, 1963. 12 vols.
- . "Nathaniel Hawthorne". 1896. *Henry James: Essays on Literature, American Writers, English Writers*. New York: The Library of America, 1984, 458-68.

- . *The Tragic Muse*. 1890. *The Novels and Tales of Henry James*. vols.7 & 8. New York: Scribner's, 1937. 26 vols.
- . "Walt Whitman's *Drum- Taps*. 1865. *Henry James : Essays on Literature, American Writers, English Writers*. New York : The Library of America, 1984. 629- 34.